

相馬(+)を歩こう!! 第7弾

相馬中村藩の戊辰戦争の跡を巡る旅
相馬市千客万来館

相馬中村藩と戊辰戦争



相馬中村藩と戊辰戦争

白虎隊や大河ドラマ「八重の桜」などを通して、戊辰戦争では会津地方が激しい戦場になり、たくさんの犠牲者が出たことは知られていますが、ここ相馬中村藩も多くの戦いに参戦し、犠牲者(武士・農民合わせて112名)がでています。今回は、相馬市付近の戊辰戦争にゆかりがある箇所を巡ってみることにしましょう。

○戊辰戦争中の明治元年(1868年)5月6日、仙台藩・米沢藩を中心に奥羽越列藩同盟が成立した。相馬中村藩も、これに加盟し新政府軍と戦った。新政府軍は、いくつかのルートで北上したが、相馬中村藩は、茨城県平潟港から福島県浜通りを進むルートを中心に派遣された。

「相馬中村藩が参加した主な戦いと出来事」

- ・6月29日、7月1日、7月13日 磐城平城攻防戦
 - ※磐城平城落城時残っていたのは、磐城平藩兵と相馬中村藩兵のみ
- ・7月22～26日ころ 広野の戦い
- ・7月30日、8月1日 浪江の戦い
 - ※同盟軍は相馬中村藩兵のみ
- ・8月6日 相馬中村藩降伏(以後新政府軍へ)
- ・8月7、9、10日 黒木の戦い
- ・8月11、16、20日 駒ヶ嶺を巡る戦い
- ・9月10日 旗巻峠の戦い
 - ※玉野でも、たびたび仙台藩と戦った記録あり
- ・9月15日 仙台藩降伏

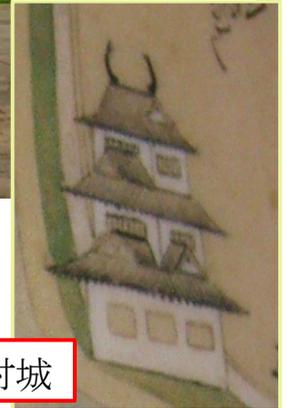
wikipediaより引用
(日付は旧暦表記)



相馬中村藩の本拠地中村城



慶長16年(1611年)相馬中村藩初代藩主相馬利胤が築城後、260年にわたり相馬氏の居城となった中村城。現在は、馬陵公園として市民の憩いの場となっている。



馬陵公園内にある石碑



天守閣があったころの中村城

左：相馬胤真は一門家老の相馬将監家の当主で、大坪當流馬術の免許皆伝者。父は、新政府軍との戦いで活躍し、広野の戦いで戦死した相馬胤真。(父子同じ名前)

右：羽根田永清は相馬中村藩士で、戊辰戦争に従軍し、戦後は自由民権運動に参加。

「戊辰戦争の戦場跡」碑 「仙台藩松山隊勇戦地」碑

戊辰戦争終盤、仙台藩は新地町南部の菅谷・高田・今泉地区、丸森町の旗巻峠で警備を固めていた。戦闘は慶応4年(1868年)8月7日より始まったが、11日には拠点の駒ヶ嶺城が陥落した。その後反攻作戦が行われ、今泉地区に展開した亘理隊と松山隊は激戦を繰り広げ、退路を断たれた松山隊は、多くの戦死者を出した。

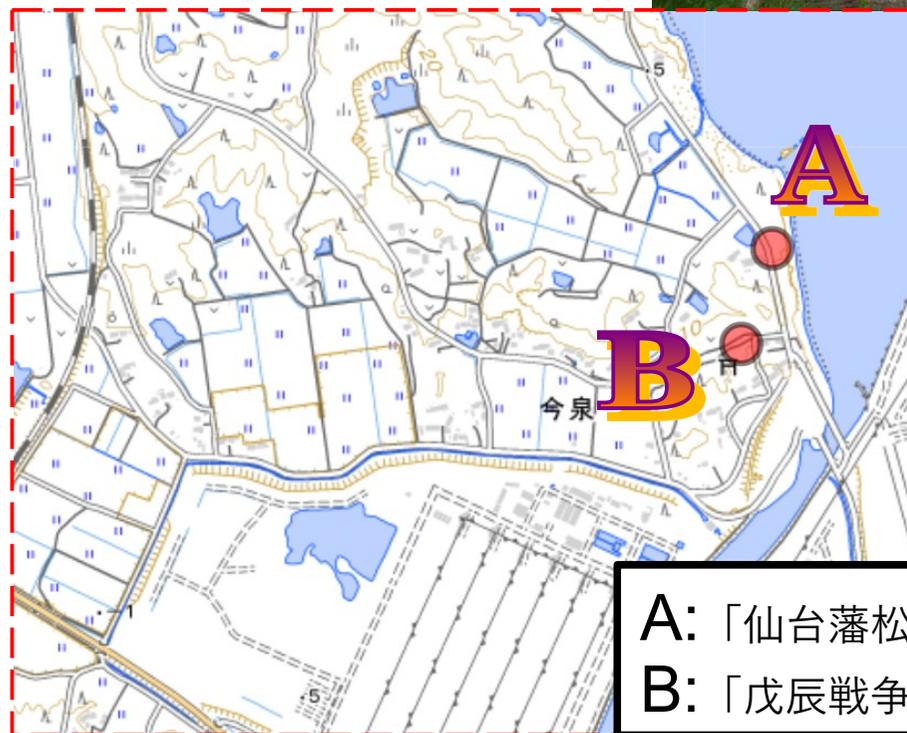
※相馬中村藩は8月6日に降伏後新政府軍として参戦。



「仙台藩松山隊勇戦地」碑

「戊辰戦争の戦場跡」碑

新地町今泉 共同墓地内



新地町今泉地内
(県道相馬亘理線沿い)

A: 「仙台藩松山隊勇戦地」碑
B: 「戊辰戦争の戦場跡」碑

駒ヶ嶺城跡

永禄年間から天正初年に、相馬盛胤が伊達氏への防衛網を強化するために築き、藤崎摂津守を城将として置いた。天正17年（1589年）5月に、伊達政宗の家臣・亙理重宗が駒ヶ嶺城を攻略すると幕末に至るまで仙台藩領となり、駒ヶ嶺城は浜通りの伊達領最南端の城砦となった。

慶応4年（1868年）の戊辰戦争の際には、仙台藩の浜通り方面軍の本営が置かれたが、8月6日に相馬中村藩が新政府軍に降ると、翌7日には新政府軍として駒ヶ嶺城攻めを開始、11日には相馬・久留米藩兵等の攻撃により陥落。仙台藩は16日と20日の二度にわたって奪還作戦を仕掛けたがいずれも失敗に終わった。本丸跡には城跡碑と案内板が、南麓には「戦死塚」および「仙台藩士戊辰戦没之碑」が建つ。



「戦死塚」

仙台藩士
戊辰戦没之碑



旗巻峠古戦場

旗巻峠は、相馬氏の所領であったが伊達政宗が天正13年(1585年)に金山城と同時に奪取した。※天正12年(1584年)という資料もあり。戊辰戦争時は、仙台藩の重要な拠点であり相馬中村藩が新政府軍に下った後は、同盟側の最後の拠点となった。庄内藩・米沢藩の応援を得て大砲4門を主軸として1200名で守りを固める仙台藩に対し、勢いを増す新政府軍は駒ヶ嶺城を落とした後の9月10日3方向から攻撃を仕掛けた。これにより仙台藩は総崩れとなり退却した。この翌日11日に仙台藩が降伏したため、戊辰戦争中仙台藩にとって最後の戦場となった。(案内板より抜粋)

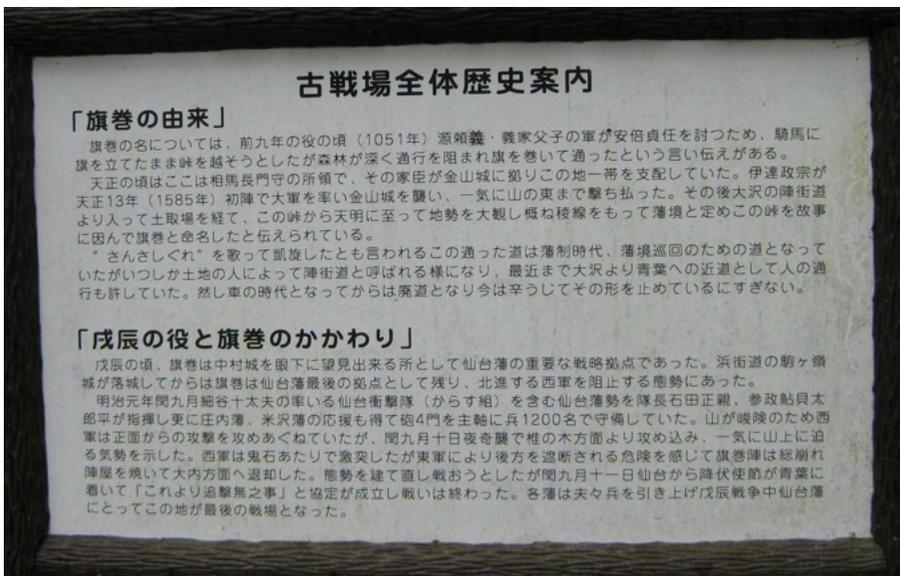


相馬大内線からの進入口

北砲台から望む相馬市街



たくさんの石碑



古戦場全体歴史案内

「旗巻の由来」

旗巻の名については、前九年の役の際(1051年)源頼義・義家父子の軍が安倍貞任を討つため、騎馬に旗を立てたまま峠を越そうとしたが森林が深く通行を阻まれ旗を巻いて通ったという言い伝えがある。天正の頃はここは相馬長門守の所領で、その家臣が金山城に拠りこの地一帯を支配していた。伊達政宗が天正13年(1585年)初陣で大軍を率い金山城を襲い、一気に山の東まで撃ち抜いた。その後大沢の陣街道より入って土取場を経て、この峠から天明に至って地勢を大観し概ね稜線をもって藩境と定めこの峠を故事に因んで旗巻と命名したと伝えられている。

「さんさしくれ」を歌って凱旋したとも言われるこの通った道は藩制時代、藩境巡回のための道となっていたがいつしか土地の人によって陣街道と呼ばれる様になり、最近まで大沢より青葉への近道として人の通行も許していた。然し車の時代となってからは廃道となり今は辛うじてその形を止めているにすぎない。

「戊辰の役と旗巻のかかわり」

戊辰の頃、旗巻は中村城を眼下に見望出来る所として仙台藩の重要な戦略拠点であった。浜街道の駒ヶ嶺城が落城してからは旗巻は仙台藩最後の拠点として残り、北進する西軍を阻止する態勢にあった。明治元年閏九月細谷十太夫の率いる仙台衝撃隊(からす組)を含む仙台藩勢を隊長石田正嗣、参政船貝太郎が指揮し更に庄内藩、米沢藩の応援も得て砲4門を主軸に兵1200名で守備していた。山が峻険のため西軍は正面からの攻撃を止めあぐねていたが、閏九月十日夜奇襲で椎の木方面より攻め込み、一気に山上に迫る氣勢を示した。西軍は鬼石あたりで激突したが東軍により後方を遮断される危険を感じて旗巻陣は総崩れ陣屋を焼いて大内方面へ退却した。態勢を建て直し戦おうとしたが閏九月十一日仙台から降伏使節が青葉に着いて「これより追撃無之事」と協定が成立し戦いは終わった。各藩は夫々兵を引き上げ戊辰戦争中仙台藩にとってこの地が最後の戦場となった。

慶徳寺 官軍墓地



慶徳寺は、相馬駅の北西、小泉川を越えたところにある小高い丘陵の入り口に建っている。ここには、数多くの新政府軍側の墓石が建っている。(場所は、下地図赤枠部分)寺院には、墓石の碑文を記録した調書が残されており、相馬高校



墓石の刻文が不鮮明になりつつあるが、筑前藩・官軍館林藩・長藩などという文字が読み取れる。

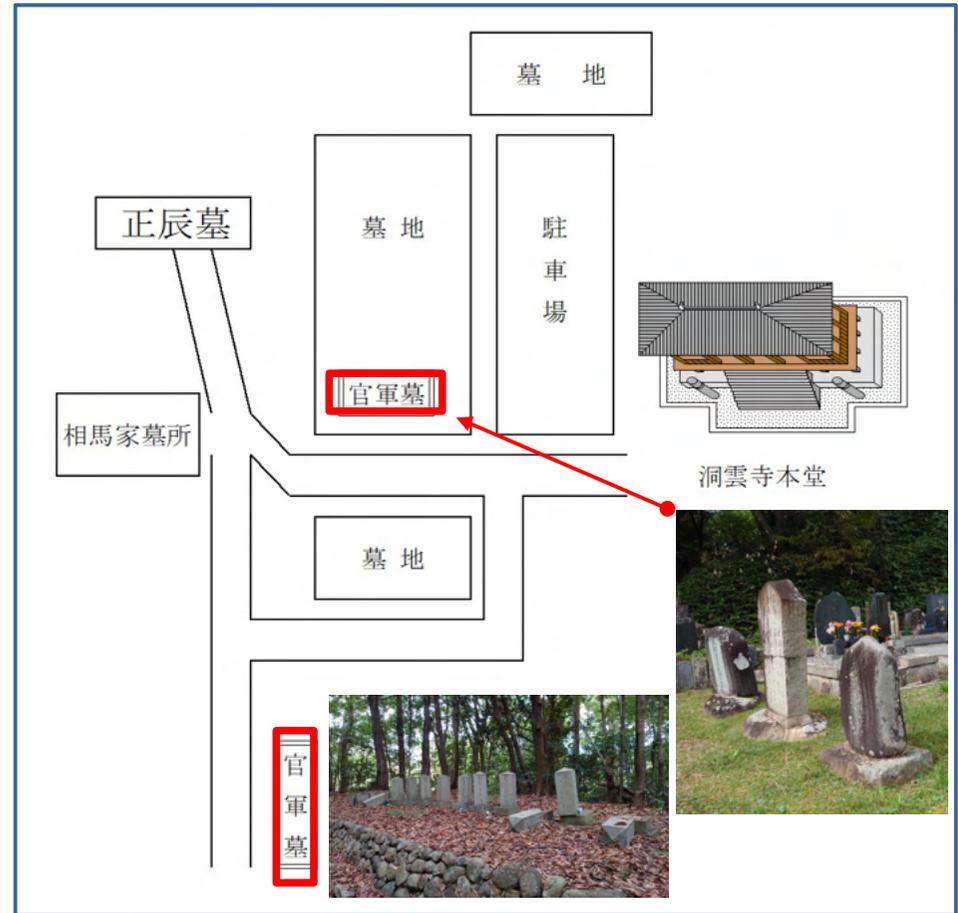


郷土部の調査によると各々の墓石には戦死者名、法名、出身藩、死亡時年齢、戦死地が刻されていた。犠牲者の詳細を知る貴重な資料となっている。また、住職の話によると近年まで遺族の方がお参りに見えていたようだ。



墓地内には、他に「双鳥の碑」や「天明大飢饉犠牲者供養塔」などが祀られている。

洞雲寺 官軍墓地



この場所は元々、中村藩の初代藩主利胤公夫人の菩提のため、明暦元年(1655年)に臨濟宗長松寺として創建され、藩校ができるまで藩の学問所として利用されていた。その後、長松寺の移転に伴い、これまであった小高地区から移り、現在に至る。

※ 戊辰戦争官軍の墓



堀内寛左衛門墓

中村藩。番頭。明治元年6月24日白河金山で戦死。



津金甲太墓

尾張藩。帯廻陣。明治元年8月11日盤城駒ヶ峰で負傷、21日相馬城内病院で死去。18歳。



中川源八郎墓

加納藩。源八とも。徴兵七番隊。美濃若手山の人。明治元年8月8日盤城駒ヶ峰日尻口で負傷、25日同国中村で死去。40歳。

洞雲寺(とううんじ)のホームページには、寺の沿革や葬られた官軍兵士の詳細が記載されている。



墓地内には、「相馬家墓所」に藩主の奥方さまやご息女、「二宮仕報の功労者 草野正辰の墓」などが祀られている。

藩は、中村藩が官軍に降伏する前後で犠牲者の扱いが違わないように総督府に働きかけ、同じように供養できるように許しを得た。また、「戦死姓名録」として戊辰戦争の戦死者の名前、戦死月日、年令などを富田高慶が郷別にまとめた。